

令和5年1月

あけましておめでとうございます。

令和5年となりました。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

1月12日、岸田総理大臣がオタワを訪問し、トルドー首相と首脳会談を行いました。本年日本はG7の議長国です。5月にG7広島サミットが行われるほか、多くの閣僚級会合が開催されます。また、3月には日本から、10月にはカナダから、それぞれビジネスミッションが派遣されることが発表されました。州政府からも、今月、キング・サーマ・インフラ大臣とリサ・トンプソン農業・食糧・郊外問題大臣が相次いで訪日されます。このように、兔年にふさわしい跳躍のスタートを切りました。

1月22日に日系文化会館(JCCC)で3年ぶりとなる「お正月会」が開催されました。事前のチケット販売は1000枚を越え、150名ものボランティアの方が参加する、大変に賑やかなイベントになりました。なお、JCCCは今年で創設60周年を迎えます。

お正月会開会式の様子



挨拶の様子



私も、今年度の外務大臣表彰を授与された前田典子先生のご指導を頂き、書き初めに挑戦しました！



1. フォーリーアーティスト 小山吾郎氏のスタジオ訪問

オンタリオ州では多くの日本人の方が活躍しておられますが、その中にフォーリーアーティストの小山吾郎様がおられます。フォーリーとは、映画など映像の音響効果製作の1つです。私自身、小山様をある雑誌の記事で拝見するまでこの仕事の存在を知りませんでした。映画には俳優のセリフはもちろんですが、ミュージカルであればオーケストラ、アクション映画であれば爆発音、SFものであれば宇宙船が飛ぶ効果音があります。フォーリーは、映画やテレビドラマで俳優さんが歩く、座るなどの動作、生活音から出る音を映像に合わせて、実際に人間(フォーリーアーティスト!)が音を作り、録音することをいうそうです。



フォーリー・スタジオの見学



お正月早々、トロント市郊外にある小山様が働かれているスタジオを訪問し、実際の録音の様子を見学させていただきました。

小山様が働かれているスタジオには様々な小道具があります。映像の音全体を貫くものとして「足音」が必ずあるので、小山様の製作は、まず足音から始めるそうです。いろいろな足音を作り出すため、様々な靴が用意されています。砂浜や洞窟、岩山などを歩く音も必要でしょう。小石、砂を詰めた袋を踏みしめて足音を作ります。時にはお米を使うこともあるそうです！フォーリーの依頼を受けた映像から生の音声を除去し、小山様が実際の俳優の動きに合わせて効果音を入れていきます。俳優さんの動きに合わせて小山様もいわば演技をします。間近のマイクや天井のマイク、また少し離れたマイクにそれらの音を録音し、専門の方が2名でコンピューターを駆使、実際の画面にぴったりと合ったタイミングで音を入れていきます。足音を入れた後は、持ち物、動作の音声です。食事を作る音、タイプライターを打つ音、電話をかける音など様々な場面があり得ます。スタジオのダイヤル式の黒電話やタイプライターが活躍します。時代劇用には刀やナイフ。登場人物は1人だけではありません。画面に映る一人ひとりに合わせて絶妙のタイミングで音を作っていきます。スタジオの作業は実にキビキビと、しかし実に楽しそうに音を入れていかれます。できあがった映像は小山様の音で本当にその場所にいるような感覚がします。まさに音響の魔術師と言えましょう。



国際交流基金と Momo Films のスタッフの方々と一緒に音作り。



小山様のご好意で我々も音響作成に参加させていただきました！多くの人が行き交う場面をお邪魔した面々で音を録音しました。やってみると、本当に楽しい作業です。単に歩くだけでもいろいろな音があり得るのだ、と感心しました。

これまでハリウッドの大作も多く手がけられ、また 2012 年にはエミー賞も受賞された小山様には多くの映像製作者から依頼が来るそうです。どのように効果音を作成しているかは、映像製作者側には知らせない場合が多いそうですが、折角音入れ作業をしても、最終的にはディレクターや監督の方がどの音を使用するかを決められるそうです。ある場面では、小山様が歩かれた音が大きく響くこともあります。場面によっては効果音を全て消去し、オーケストラの音楽が取って変わる場面もあるそうです。生活効果音等は当たり前のものであり、見るものにとり「作製された」とは通常、感じ

られません。小山様の作業は究極の裏方とも言えましょう。しかし、小山様のような専門の方がいなければ、映像のリアリティーは出ません。

映画製作、映像製作は、国や地域、また、製作者の考え方、歴史的な発展の仕方、文化の違いなどにより考え方も異なるそうです。オーケストラによる音楽を重視する製作者、意識的にクオリティーの悪い音を入れたがる製作者。多様な要望にフォーリーアーティストは応えなければなりません。小山様のお話によれば、例えば日本のチャンバラ映画では、日本刀で人が斬られる音がありますが、あれはかの黒澤明監督が音響担当者に頼んで意識的に造り出されたものだそうです。製作される映像により時代背景も異なりますので、昔の作品に現代のハイクオリティーの音を入れてもかえってそぐわないことになるかもしれない、との事でした。奥の深いいろいろなお話をお聞きすることができ、また実際に体験までさせていただきました。次回から映画などを見るとときには「耳を凝らして」見てみたいと思います。

2、カナダアジア太平洋財団(APF)女性起業家訪日ミッション・フォローアップ会合

昨年12月、APFは第2回目となる女性起業家約40名のミッションを日本に派遣しました。このビジネスミッションをフォローアップするため、1月20日総領事公邸にて参加者が再度ハイブリッドで集合し、成果を共有するとともに今後の方向性について話し合いを持ちました。

在外公館では、日本の対外経済関係を強化するため、外国での動きをフォローするとともに、このような具体的な動きを積極的に支援しています。

今回のミッションはメインテーマに「ヘルスイノベーション」及び「クリーンテック」を掲げ、東京、横浜、大阪、京都を訪問しました。今回の会合では訪日の様々な成果を共有。参加者からは実際にいくつもの契約締結に至った話や、現在も数多くの交渉が続いていること、日本の企業とつながりを持ってたという成果が報告されました。このミッションで得たつながりは今後も継続されていくとの決意が示されました。



Pamela Vitale, COO
DIAGNOSTICS BIOCHEM CANADA Inc.



Iris Redinger, CEO
MATERIAL FUTURES

ミッションに参加されたカナダの起業家をお二人ほど紹介したいと思います。

DIAGNOSTICS BIOCHEM CANADA Inc. (DBC)

Pamela Vitale COO

高齢化社会が進むにつれ、がんや糖尿病、心臓病を事前に予防し、また、その兆候をつかむには、免疫上の検査は欠かせないツールの1つとなっています。DBCは50年近く免疫分析キットの開発販売を手がけてこられました。すでに欧米各国の病院施設に納入の実績を持たれています。インド太平洋の大きなマーケットである日本市場とも関係を構築すべく今回のミッションに参加されたそうです。訪日前から、日本の関係者とは連絡を取っておられたとのことですが、今回のミッションではじめて対面で交渉を進め、ミッション派遣中に第1号の契約締結を交わされました。

[写真]

MATERIAL FUTURES

Iris Redinger CEO

現代の生活において、衣服を始め、染色は我々の生活に欠かせないものの1つです。しかし、現在の業界は石油化学由来の着色剤が主流。同社は環境に優しいバイオ着色料を採用し、開発販売に取り組んでおられます。自然界には様々な鮮やかな

色が存在します。花はもちろん、植物、動物などにも様々な色素が存在しています。これらを微生物によって製品化し、バイオ着色料として新しい市場の創設と開発を目指しておられます。日本の関係者との面談でもかなりの企業がバイオ着色料に関心を示したとの事でした。



日本経済の更なる発展に向け、イノベーションは欠かせない分野です。カナダにおいては、すでに GDP の 10%以上をスタートアップ関連事業が占めているとのこと。このような動きを日本にもつなぎ、刺激を受けることは日本経済の活性化に有益だと思います。今回の参加者はいずれも女性の企業家の方で、社会が抱える問題を自らの事業を通じて解決したいという意欲にあふれた皆さんでした。いわゆるユニコーン企業は日本においてはまだ数が多くありません。今回のような交流を通じて、社会的な課題を解決し、同時に経済発展にもつなげるといった道が開けることを望んでいます。